

M-6-1-4

資料名 滿洲の棉作と昭和九年の作柄に就て
熱河に於ける棉作に就て

出所 日滿實業協會

作成年 19350220

寄贈者 編者

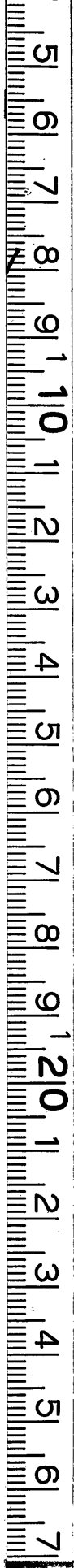
受入

注記 38P 22×15cm

昭和十年二月

滿洲の棉作と昭和九年の作柄に就て
熱河に於ける棉作に就て

日滿實業協會



日滿實業協會
年 月 日

滿洲の棉作と昭和九年の作柄に就て

滿鐵農事試驗場
遼陽棉花試驗地主任

寺 田 慎 一 氏

私は只今御紹介に預りました寺田であります。私は此の春から新設の遼陽棉花試驗地に移りまして仕事をやつて居るのでありますが、其の以前は熊岳城に居りました、隨て今日の話の中に熊岳城といふ地名が大分出ますけれども、どうか其點を豫め御含み置を願ひたいと存じます。

初めに大體滿洲の棉作の特徴といふものを御話申上げて、それから本年度の作柄概況を申述べたいと思ひます。滿洲の棉作の特徴と申しますのは、これは比較的高緯度に位する滿洲に於て棉作が出来、さうして適地を選びさへすれば將來益々有望であるといふ要素になると思ひます。

先づ氣象要素として一番大事な氣温に於て滿洲はどうであるかを吟味して見たい、世界棉作地の北部地帯と滿洲の南部地方或は中部地方の平均氣温の比較を致したいと思ひます。例を世界で最も北位にある棉作地と云はれて居ります、ロシアのタシケント並に北米の最も北の棉作地であるバージニア州のリンチバURGに取りました。それから滿洲では鞍山、これが滿洲の棉作地の中心地帯を成して居

るわけでありませす。それから滿洲の北部地方として開原を例に取つたのであります。この圖及第一表に見られる様に大體に於て各月共平均氣温は滿洲の方が低い、即ち平均氣温から言へば多少不利である。殊に春の終りと秋が氣温の度がより低く現れて居るのであります。即ち各月共多少氣温に於ては不利であります上に此の春と秋の氣温が低いのでありますからして植物の成育期間といふものは自然短く制限を受けるといふことになるのであります。

それから朝鮮に於ける棉作の一番有望地帯である木浦と氣温を比較して見ますと、七月迄は鞍山の方が高くて、秋になつて木浦の方が高くなつて居るやうで、大體氣温は木浦と鞍山地方とは相似たものであると見て宜いのであります。

第一表 滿洲及世界北部棉作地の平均氣温

地名	月	四	五	六	七	八	九	一〇
鞍山	北緯四一・〇四	一〇・一	一六・八	二一・三	二四・五	二四・一	一九・六	一〇・五
開原	〃 四二・三六	八・五	一五・四	二一・七	二四・一	二二・七	一六・八	七・九
Lynenburg	〃 三七・二五	—	一九・六	二三・七	二五・三	二四・三	二〇・六	一四・七
Tashkent	〃 四一・二〇	一四・五	二〇・九	二五・二	二七・一	二五・〇	一九・二	一二・〇
木浦	〃 三四・四七	一一・三	一六・三	二〇・五	二四・五	二六・一	二一・八	一六・一

で滿洲は斯様に世界北部の棉作地帯と氣温の比較を致しまして多少不利である、それから成育期間が短いといふ事を今申しましたが、之を植物生理學的に觀まして幼植物時代には何度の氣温がなければならぬ、或は開花成熟期には何度の氣温がなければならぬといふ事が種々の學者に依つて發表されて居りますが、其の所要氣温には滿洲に於ても平年は充分達して居るのであります、唯だ時に氣温が低いやうな年に出つておすと滿洲では比較的被害を多く受けるといふことになるのであります。平年ならば一向棉作には不足はないけれども、時偶例へば昭和六年とか本年のやうな低溫の年には影響が非常に大きく現れるといふことになりませす。

さういふやうに氣温に於ては多少不利でありますけれども滿洲に於て棉作が有望であるといふ事は次に申上げます様に滿洲は適地栽培をやつて居る、非常に土地を見て棉作に對する條件の良い土地に作つて居るといふ事と、尙ほ日照時數が非常に豊富であるといふ點であります。只今此の世界北部の氣温を申上げた棉作地帯の日照時數は數字を持つて居りませんが、朝鮮の木浦と比較致しましても大體各月共滿洲は非常に日照時數が多いわけでありませす、唯だ秋の終ひになりまして木浦の方が日照時數に於て多少多くなつて居る。併し五月から十月迄の植物の成育期間を通じて見ますれば木浦に較べて鞍山地方は約八十時間日照時數が多いのであります。即ち一日八時間太陽が照つて居るとすれば十

日位晴天が長いといふことになりす。

第二表 日照時數 (時)

地名	月別	五	六	七	八	九	一〇	計
鞍山	山	二四〇・二	二五八・五	二一五・〇	二二四・〇	二三八・五	二一九・六	一三八五・八
	浦	二四四・三	一九六・五	一八七・五	二四一・四	二〇七・五	二二七・八	一三〇五・〇

それから滿洲では非常に棉の適地栽培をやつて居る、どういふ處が滿洲に於て主要なる棉作地帯を成して來て居るか、又さういふ地帯はどういふ状態に在るかといふ事を申し上げますと、例へば奉天の南にある遼陽縣、此處は全滿の約四割を一縣で作つて居る程廣い面積を有つて居ります。其處の棉作地帯を見ますと、太子河といふ河がありまして、其の流域は多少砂地かゝつた土地であります、而して平坦なる鐵道附屬地を離れまして稍々起伏のある傾斜地から點々棉作地が見られそれから上流地方の本溪湖に近いやうな處までズツと棉の栽培地帯が及んで居ります、又千山の山麓地方もこの縣の主要棉作地帯をなして居ります。即これらの地帯は緩傾斜を成して居りまして雨が降りましても速く水が排けてしまふといふやうな状態であります、又その他の滿洲の主要棉作地である遼西地方の北鎮縣、黑山縣、錦縣地方に行きましても、又大石橋方面に於ても、やはり傾斜地であるとか、平坦地であつても下層土が砂礫地をなして居るとか、要するに寧ろ土壤が乾き易い様な地帯が即ち棉作地帯をなし

て居ると云ふ様な現状であります。

さうして又さういふ様な土地は滿洲の棉作には非常に有爲に作用して居る様に見えます、それと云ひますのは次の理由に因ると思ひます。(圖について) これは土壤水分を色々に變へてあるポットに棉を植ゑて棉の實(蒴)の成熟に要する日數を調査した第三表の數字を圖に書き表はしたものであります。花蕾期間と云ふのは蕾が着いてから花が咲く迄、蒴期間は花が咲いてから實(蒴)が開く迄、又

第三表 土壤水分と花蕾の成熟所要日數

土壤水分	花蕾期間			蒴期間			蕾・蒴期間	
	昭五	昭六	昭五	昭六	昭五	昭六	昭五	昭六
一八%	二三・三	二五・六	三九・一	四三・一	六二・四	六八・七		
二五%	二三・六	二六・〇	三九・八	四三・六	六三・四	六九・六		
三三%	二三・六	二六・九	四一・三	四四・九	六四・九	七一・七		
三七%	二四・一	二六・九	四三・〇	四四・七	六七・〇	七一・五		

蕾蒴期間は蕾が着いてから實が開くまでの日數であります、これ等の各期間の所要日數は土壤水分が一八%から次第に増加して行くにつれて段々と日數が長くかゝつて居るのであります、例へば昭和六年に於て蕾蒴期間が土壤水分が一八%の場合は六八日かゝつたものが二五%では六九日、三三%では七一日、三七%では七一日と云ふ工合に段々と所要日數が長くなるのであります。又この表に見る様

に年によつて花蕾の成熟所要日數に大きな開きがあるのであります、例へば昭和五年の様に氣溫の高い年は昭和六年の様な低溫な年に比較して所要日數が遙かに少いのであります、圖を御覽になれば一目瞭然であります。生育期間の短い滿洲ではこの花蕾の成熟に長い日數を要する事が一番危険であります、と云ふのは秋の寒さ前に開ききつてしまふ實が成熟日數が長ければ長い程少くなつて來ますから收量が少くなる、又寒さが來てから開いたものゝ品質は不良になるからであります。時たまの低溫多雨の年はこの圖の様に花蕾の成熟日數が延びる爲に收量が大いに減少して來るのであります、而してこの様な年には土壤水分が停滯する様な土地では更に成熟所要日數が長くかゝるものですから益々不利になるのであります。土壤が比較的乾燥し易い所謂、高燥地が棉花の栽培地をなして居るのはかゝる年の被害から免れんが爲めでありませう。

或は滿洲は非常に乾燥がひどいからして土壤が乾燥し易い所の高燥地の方が非常に被害を受け易いぢやないかと御心配になられるかと思ひますが、滿洲の棉作に於ては大體に於て乾燥よりも過濕の方が大きい被害を受ける様に思はれます。元來滿洲は乾燥地でありまして、百姓が乾燥地の農法に對しては非常にツレーニングを受けて居るわけでありませう。一番心配なのは種蒔き時分と發芽當時の乾燥であります、もし其の時節に乾燥がひどい時には百姓は種を蒔く量を非常に多くする、或は土壤を

鎮壓して下の地下水が上に昇つて來るやうな方法を執る。そこは非常に心得たものでありまして、播種並に發芽の心配は案外ないのであります。そして棉は非常に深根性植物でありまして、これは土質氣象状態に依つて違ふでありますせうけれども、大體二メートルは眞直ぐに直根が伸びて居ります、幼植物當時から地上部の草丈に較べまして根が非常に深くて又横にも張るものでありますから乾燥には案外強いものであります。でありますから乾燥の被害といふものは案外少いのであります。確に土壤並に大氣が乾燥して植物の生育が阻止され従つて成熟期が遅延する事はありますが氣溫が低く或は雨が多かつたりする場合の方が乾燥の甚だしい年よりも一層成熟期が遅延して被害も大きい様であります。一番よい土質は乾燥のときに水排けがよい様な土地でありますがこの様な土地は少く、現在の所ではやはり高燥地の方が安全の様であります、なほ低濕地の場合にはどういふ棉作をするのが良いかと云ふ點に就きましては只今研究中であります。

更に滿洲棉作の特徴の一つとしては各地方に適した熟度の品種が栽培されて居る事でありませう、即ちその地方では危険性の少い品種が栽培されて居る事でありませう。

滿洲に於ける棉花の種類を大別致しますと滿洲在來棉と最近滿洲に這入つて來ました陸地棉とになります、滿洲棉花の大部分を占めて居りますのは在來棉の赤木系品種であります、木が赤い爲に赤木

と云つて居ります、これには種子の白いもの或は黒いものもありますが之を一括して赤木系品種と云つて居りますが、遼西地方並に奉天附近以南一帯に栽培されて居ります、他の一つの在來種を鄭家屯白種と云つて居ります、これは鄭家屯、開原地方に少面積でありますが栽培されて居ります、これは極めて早熟な上に纖維が纖細で良質である特性を持つて居ります、以上の二つが即滿洲の在來種であります、この赤木品種の栽培されて居る地方の南部の方に最近陸地棉が栽培されて居りますこれは朝鮮の木浦から傳つたキングス系統のものであります。第八表に在來棉と陸地棉の栽培面積を掲げて居りますが調査が充分でなく各縣とも記載は出來て居りません、但し未調査のうち陸地棉の栽培されて居りますのは熱河省の凌南、青龍等の南方地方であり他には餘りありません、大體總作付面積の三割が陸地棉と見てよいと思ひます、なほこの陸地棉は滿鐵本線地方並に遼西地方に於ては南の方程割合が多くなつて居ります。而して陸地棉以外は殆ど全部赤木系統品種であり唯少數ながら康平、雙山、遼源等の北部に鄭家屯白種が栽培されて居るのであります。(圖について) この色の塗つてあるのが滿洲の棉作分布縣であつて色の薄い部分が陸地棉の栽培されて居る縣であります、その陸地棉の作付割合は第八表を御覽願ひます。この熱河地方の陸地棉は關内から傳つたものらしく色々の系統が雜つて居るのであります。これらの品種は大體に於てその地方地方に適した熟期を持つて居りさう危険性が

ないものであります。

これらの品種には改良すべき點は多々ありますがこれらの品種の特性は第四表を御覽願ひます。

第四表 纖維の特長

品 種	平均收量		纖維		
	繰棉(ヘクタール當(疋))	繰棉歩合	長さ(糎)	張力(瓦)	撚 曲
赤 木 黒 種	三一八	二五・八	二・四	八・二	九〇・八
鄭家屯白種	二六九	二三・四	二・八	七・四	一〇〇・八
キングス	三六六	三五・二	二・五	五・九	一二五・四

大體に於て鄭家屯白種といふのは非常に纖維が長いのでありまして二・八センチあります。赤木黒種が二・四センチであります。大體二・六糎あれば一時になるわけであります、此の鄭家屯白種は丁度一時以上に達して居るといふわけであります。撚曲數は一時の長さの數でなくして纖維全長の撚曲數を表はしたものであります。

大體に於て滿洲の在來棉並に滿洲で從來作つて居ります陸地棉の紡績的價値は兩者とも大差はなく米棉のストリクト・ロウ・ミドリリング或はロウ・ミツドリリング級に行つて居るといふことであります。或人は印度棉の最上級品でありますブローチのスーパーファインあたりに相當して居ると云ひますが

之は取引の關係上便利であるためであつて品種から言へば總ての點に於てブローチよりも優れて居るやうであります。

それから尙ほ滿洲棉作を有利に導いて居る點と致しましては、滿洲は非常に表土が厚く且つ肥えて居り農耕地として拓けてからまだ新しいといふ點であります。實際棉のみならず普通作物でも朝鮮あたりと比較しても滿洲は遙に單位面積からの生産量が大きくなつて居ります、又田舎に這入りますと土地を初めて拓いたといふ老人が未だ生存して居る位でありますから地力は非常に肥えて居るやうであります。なほ滿人の農民の性質として非常に勤勉で素朴である、又能く自分の利益の爲には勞力を吝まぬといふやうな性質がございまして非常に畑の手入れが宜い、殊に棉といふものは手入れの如何が判然と生育の上にはあらはれて參ります、特に幼植物時代の手入は速く草丈を大きくし花蕾の形成を早めるのであります。さうして滿洲は先程申上げたやうに氣象上多少不利でありますから幼植物時代に速く植物體を大きくした方が非常に特策であります、そこへ行きますと滿洲の農民は非常に手入れが宜くて、十分手入れをやりますから、反當收量なんかは世界の主要棉作地に劣らぬ反當收量を擧げて居るぢやないかと思つて居ります。

それから滿洲に於ての棉作と普通作との收支計算であります、大體普通作中で最も收益の有るものは高粱であります、高粱よりも棉作の方が二倍或は三倍の收益があるのであります。これは數字を申上げると宜いのですが煩雜になりますから極く大雑把に申しますと、一町歩當り棉を植ゑた場合に小作料とか肥料とか勞役費等、總て入れますと百六十四圓の支出があります、収入の方は三百五圓、損益計算がプラスの百四十一圓。高粱は支出が百七圓、収入の方が百四十圓、差引プラスの三十三圓位の収入があるのです。この計算は棉のみならず高粱も收量の良い昭和七年でございますが、平年に於きましても棉の方が普通作、特に此の收益のある高粱に較べまして二倍或は三倍の純収入があるのであります、それから棉は非常に女手間を要するのであつて、間引きから收穫の時に女手間を要するものであります。自家用の勞力を提供するならば此の勞役費が収入に這入つて來るのでありますから農家の收支計算は更に有利になるといふことは勿論のことでございます。

これ等の要素、即ち氣象狀態、氣象は多少不利であります、日照時數が多い事。それから栽培品種が適當の熟期を有つたものが分布されて居る、栽培地は高燥地に多くて氣象狀態の不利な年でもそれから遁れ得るといふ事と地力が非常に富んで居る、手入れも非常に行き届いて居る、それから收支計算をして見ても棉の方は普通作に較べて二倍或は三倍の収入がある、斯ういふやうな要素が滿洲に於ける棉作を有利に導いて居るのであります、適地さへ選んで獎勵したならば將來益々有望である

と考へて居る次第であります。之を以て滿洲棉花栽培の特徴といふ事に就きましては打切りまして、次に本年度、即ち昭和九年度の作柄の概要に就て御話を申し上げます。

本年度の氣象要素は第五表に掲げて居ります。今年は南部地方の熊岳城に於ても或は中部地方の鞍山に於ても共に非常に氣温の昇らない年でございました。一日の平均氣温に近い一〇時氣温と最高氣温とに於きましては、大體五月は例年或は前年よりも高かつたのであります、それで發芽状況は非常に良く行つたのであります、五月以後幼植物が芽を出しそろ／＼伸び始めるやうな時期から雨が非常に多く低温が続いたのであります。其爲に病氣に罹り、甚しいのは苗が腐り或は枯れるものですから他の作物に蒔き代へなければならぬといふこともございました。五月以降は最高氣温、及び一〇時氣温が各月共前年或は例年よりも低いのでございます。さうして秋の末に於て、漸く氣温が平年並になつて來たのであります。此の前年即昭和八年といふのは私が経験した中では最も恵まれた理想的な年でございますので、特にこの年も表に掲げた次第であります。次の日照時數を見ますと熊岳城地方に於きましては本年は寧ろ平年に比較して多いやうであります。併し鞍山地方はどうかと言ひますと、前年は平年よりも非常に日照時數が少い、でありますから南部地方は日照時數の點から言ひますれば平年よりも寧ろ有利でございました。それから中部地方に於きましては氣温が低いし日照時數が少い

ので非常に平年よりも不利な年でありました。降水量を見ますと、南地方は非常に多いのであります、而して日照時數が平年よりも多いといふことは一回の降水量が非常に多いわけであります。それに反して鞍山地方は降水量はさう大して多くなく、小さな雨の日が続いたといふことになります。此小

第五表 滿洲に於ける本年の氣象

地名	十月			九月			八月			七月			六月			五月		
	前	本	累	前	本	累	前	本	累	前	本	累	前	本	累	前	本	累
鞍山	10.1	10.2	14.9	18.3	22.9	26.1	23.3	24.9	24.7	25.7	22.9	22.7	24.9	20.9	21.3	17.7	17.7	17.3
熊岳城	10.1	10.2	14.9	18.3	22.9	26.1	23.3	24.9	24.7	25.7	22.9	22.7	24.9	20.9	21.3	17.7	17.7	17.3
鞍山	1.6	1.6	3.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6
熊岳城	1.6	1.6	3.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6
鞍山	1.6	1.6	3.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6
熊岳城	1.6	1.6	3.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6

日照時數			降雨量			(時)數			(耗)量		
山 鞍			山 鞍			城 岳 熊			城 岳 熊		
前	本	累	前	本	累	前	本	累	前	本	累
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
二二七・九	二二三・八	二二四・〇	六六・六	六〇・九	四六・八	二六八・八	二九四・三	三二四・九	二五・九	二五・九	四一・〇
二二三・六	二一七・五	二二四・四	九一・六	一二五・七	六五・五	二七四・三	二六〇・一	二九〇・八	一一一・七	一一一・七	五二・八
二二〇・八	一九三・八	二二〇・八	一一三・五	一一二・一	一五九・七	二三八・七	二六七・九	二八一・四	一六七・四	一六七・四	一四九・一
二五〇・〇	二〇六・三	二二〇・八	一四〇・九	一七二・七	一七二・四	二四〇・七	二三一・四	二九三・四	三八一・〇	三八一・〇	一四六・九
二二九・八	二五一・三	二五〇・〇	五〇・三	五〇・八	六一・三	二四六・一	二八一・三	二九七・七	三九二・二	三九二・二	六五・六
二二九・八	二五一・三	二五〇・〇	一三〇・六	二五・七	六八・九	二四〇・四	二七四・八	二七八・九	三四・〇	三四・〇	四二・〇

な雨が毎日降り続くといふやうな状態は非常に棉には悪いのでございます。併しながら先程申し上げましたやうに滿洲の主要棉作地帯といふものは傾斜地であり稍々砂質地である爲に案外此等の氣象要素から想像したよりも被害を受ける事が少かつた。併し高燥地でないやうな平地、或は排水の悪い土地に蒔かれた棉といふものは非常に悪くて成熟期が二週間或は三週間も遅れて居るのであります。尙ほ地方的に觀ますと、春の風の爲に大分棉が害されました他の作物に代へたのもあります。併へば錦縣

一縣で種をゑろした面積が約六千町歩でございます、さうして改播したのが二千四百町歩、約四割は棉が駄目になつてしまひまして他の作物に蒔き代へたといふ事實があります。尙ほ之に類したのが遼西地方の北鎮縣とか義縣とか錦西縣地方にございます。それから水の害の爲に改作したのは、この遼河下流地方の諸縣に多いのであります、即海城縣遼中縣等の低い部分が水に浸つて棉が枯れてしまつたのもあります。この改作した面積は全滿で七千町歩位あります、それで實際棉の收穫された總面積は第八表にもあります様に約八萬四千町歩でございます。

次に本年の反當收量は平年に比較してどうかといふ事を申上げて見たいと思ひます。これを知らるのには毎年同じやうな在來の方法で栽培して居ります熊岳城試験場の豊凶試験が最も合理的と考へましたので之に依つたのでございます。即第六表がそれでありす。先づ滿洲在來棉の赤木黒種の方を見ますと。開花始の七ヶ年平均が七月の十八日であります、今年七月の十五日、開花に於ては少し早かつた。開絮に於ては平年は九月の四日でございますが、本年は九月の九日、即ち約五日乃至一週間遅れて居るのでございます。さうして收量は平年即ち七ヶ年平均反當一八四斤であつて本年は一八七斤即大體に於て平年並みであります。陸地棉を見ましても開花開絮は平年より四、五日早くなつて居りますが、收量を見ますと九月十月の實棉收量は反當の一四八斤、それで本年は平年よりも

多少多といふ結果でございます。

即、大體に於て兩品種とも收量は平年並と見てよいのであります。

第六表 熊岳城に於ける豊凶考照試験

赤木黒種 (反當り)

年 度	項 目	開花始		開絮始		實		計		木探		繰		繰		歩 合
		月	日	月	日	九月	十月	木探	繰探	木探	繰探	繰探	木探			
昭和三年		七月	二六日	九月	一日	一〇四・三	六九九	一七四・二	一〇〇	四六・七	〇・二	二六・八	二五・七	二六・八	二六・八	%
昭和四年		七月	一六日	八月	二七日	三〇・三	一一三・九	一四四・二	—	三七・一	—	—	—	—	—	%
昭和五年		七月	一七日	八月	二二日	一五六・七	六七七	二二四・四	—	六〇・一	—	—	—	—	—	%
昭和六年		七月	三〇日	八月	一七日	三二・二	五七・八	九〇・〇	七・九	二二・一	二・〇	二・四	二・四	二・四	二・四	%
昭和七年		七月	一六日	八月	三一日	一七八・二	五四・一	二二二・三	一二・四	六二・六	三・三	二・六	二・六	二・六	二・六	%
昭和八年		七月	一七日	八月	二二日	一六三・四	七三・二	二二六・六	—	六一・一	—	—	—	—	—	%
昭和九年		七月	一五日	八月	九日	一二九・九	五七・〇	一八六・九	八・八	四八・九	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	%
平均		七月	一八日	八月	四日	一一三・六	七〇・五	一八四・一	四・三	四八・四	一・一	二・一	二・一	二・一	二・一	%

キングスイムブルード

年 度	項 目	開花始		開絮始		實		計		木探		繰		繰		歩 合
		月	日	月	日	九月	十月	木探	繰探	木探	繰探	繰探	木探			
昭和四年		七月	二三日	八月	一〇日	—	六一・〇	六一・〇	—	二〇・〇	—	—	—	—	—	%
昭和五年		七月	一七日	八月	九日	五四・九	一二五・八	一八〇・七	一五・四	六四・三	五・八	三五・六	三五・六	三五・六	三五・六	%
昭和六年		七月	八日	八月	一〇日	—	一〇一・四	一〇一・四	四九・五	三四・三	一八・四	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	%
昭和七年		七月	二〇日	八月	二五日	八九・五	七二・〇	一六一・五	三九・二	五四・〇	一三・五	三三・一	三三・一	三三・一	三三・一	%
昭和八年		七月	二〇日	八月	一九日	八七・五	一六七・八	二五五・三	二五・一	九一・七	七・九	三五・九	三五・九	三五・九	三五・九	%
昭和九年		七月	一九日	八月	一九日	四〇・三	一〇八・二	一四八・四	二二・四	四九・六	八・四	三三・四	三三・四	三三・四	三三・四	%
平均		七月	二三日	八月	二二日	四二・一	一〇二・七	一四四・八	二二・〇	五〇・〇	八・一	三四・二	三四・二	三四・二	三四・二	%

去年は非常に收量の良い年でございましたが、九年に較べるとどうであるかと思ますと、去年即ち昭和八年度を百と致しますれば本年は在來棉が七十九%、即ち二割減の收量でございます。それから陸地棉の方は約四割減といふ状態であります。もつともこの陸地棉は全々手を加へない品程即滿洲へ這入つたまゝの品種であります。これは良い年は非常に良い變りに不順な年には反對に收量もめつさり少いのであります。

それから中部地方はどうであるかと申しますれば、中部地方に於ける豊凶試験といふものは未だありませんので、大體地方の作況作柄から推し考へるより外ありません。先づ中部地方或は遼西地方の成熟期の報告を見ますと第七表の如くであります。大體遼陽、海城それから遼西地方に於ても開花は

第七表 地方の成熟期

品名	在來棉		陸地棉	
	開花	開絮	開花	開絮
遼陽縣	七月中旬	八、二四	八月	九、九
海城縣	七月中旬	八、二三	八月	九、九
黑山縣	七、一七	九、三	七月	九、上旬
北鎮縣	—	八、三一	—	—

七月の中旬頃から開き始めて居るのであります。そして開絮は八月の下旬乃至九月の初めに開き始めて居るのであります。熊岳城の試験成績の開花始、開絮始といふのは全圃場の植物體の三分の一が開いた時を採つて居るのであります。今申上げた中部地方或は遼西地方の熟期は開き初め所謂走りの時期頃と思はれます。熊岳城の開花始或は開絮始に較べますれば多少早いやうでありますけれども、實際圃場全體の三分の一が開く時期ならば熊岳城と大差はないと思はれます。大體熟期から見ますれば中部地方も南部地方の熊岳城と大差はないやうに見て居ります。それから中部地方、北部地方の反當收量は實驗事實がございませんから次に申上げます全滿收量豫想といふ所で引括めて申上げたいと思ひます。

先づ第八表を御覽願ひたいと思ひます。

第八表 滿洲に於ける棉花作付並に豫想收量 (康德元年)

縣名	栽培面積	在來棉	陸地棉	陸地棉栽培割合	收量豫想高 (實棉)	反當收量 (實棉)
遼陽	三二、六〇三・二〇	二六、〇八二・六〇	六、五二〇・六〇	二〇%	五九、八六三、六四〇	一八四
海城	四、二九二・五二	二、一六一・五〇	二、一三一・〇二	五〇	七、七三四、五〇四	一八〇
綏中	六一・七三	二七・五四	三四・一九	五五	七二、〇五六	一一七
義山	五、一〇二・九八	四、五九二・六八	五一一・三〇	一〇	七、五八八、九〇二	一四五
黑山	六、三二四・三〇	五、六九一・八七	六三二・四三	一〇	八、九二三、五九〇	一四一
錦州	二、八四〇・〇〇	二、五五六・〇〇	二八四・〇〇	一〇	三、三八三、六〇〇	一一九
蓋平	一一、六一一・五二	三、五二五・三五	八、〇八六・一七	七〇	一一、〇二四、六四四	一〇四
興城	二九七・七五	二一五・四五	八二・三〇	二八	三四四、六九九	一一六
錦西	一、六一六・八〇	一、一五六・八〇	四六〇・〇〇	二九	一、七八〇、六九六	一一〇
復陽	三〇〇・〇〇	九〇・〇〇	二一〇・〇〇	七〇	四一二、八〇〇	一三八
朝陽	一、五〇〇・八〇	三七五・〇〇	一一二五・〇〇	七五	一、四四六、七五〇	九六
凌源	九六八・〇〇	八八・〇〇	八八〇・〇〇	九一	一、四三三、八七〇	一四八
遼中	二、二三八・六〇	二、二三八・六〇	不詳	—	二、八三二、九三〇	一二七
北鎮	三、〇〇〇・〇〇	三、〇〇〇・〇〇	不詳	—	三、三四〇、〇〇〇	一一一
阜新	三〇三・〇〇	二七二・七〇	三〇三・〇〇	一〇	—	—

懷德	撫順	寬甸	梨樹	康平	彰武	新民	開原	鐵嶺	瀋陽	昌圖	莊河	安東	盤山	岫巖	營口	鳳城	臺安
二・五三	三六・一二	二二・四四	二〇八・六五	二、一二七・九〇	六四・〇九	六二八・〇二	一四・〇一	△ 三・二四	五七・六〇	一四九・七〇	一八・五七	△ 三九・六〇	七九一・三九	三一〇	五一六・五五	九〇・二八	一、六一三・七六

興隆	青龍	凌南	灤平	隆化	建平	平泉	承德	清源	遼源	桓仁	興京	西豐	雙山	法庫	本溪
△ 一八〇・〇〇	△ 六〇〇・〇〇	△ 二、四〇〇・〇〇	△ 一八〇・〇〇	△ 三〇〇・〇〇	△ 六〇〇・〇〇	七・二〇	△ 五七・〇〇	〇・八四	三・八二	三・九七	一三・六二	一・五八	一五・九四	二三五・八五	四二六・〇〇

計 八四、二〇三、七七 五二、〇七四、〇九 二〇、九八六、三一 二九 一一一、一八二、六八一

備考 △印は去年(大同二年)の調査に依る

此の表は棉花協會の指導員並に縣公署あたりから集つた數字を其まゝ書込んで參つたのであります。一番上の欄が栽培面積でございます。即ち實際に收穫された面積を縣別に出して居るのであります。下から二番目の欄が收量豫想、之も各指導員が實際踏査した收量豫想を書いたのでございませす。そして一番下の欄に此の收量豫想を面積で割りました反當收量を參考のために掲げて見ました。今年の全滿に於ける栽培面積（收穫した面積）は八萬四千町歩でありまして、前年度は五萬二千町歩でございました、ですから前年度に較べますれば本年度は約六割の増加であります、そして此の第八表に反當收量を掲げて居ります十四縣の去年と今年の反當收量を見ますといふと、去年は十四縣で四萬三千町歩作られて居りまして收量は實棉で八千六百萬斤、即ち反當二百二斤といふ數字になつて居ります。そして其の十四縣が本年はどうなつて居るか、本年は七萬二千町歩作られまして一億一千萬斤、即ち反當百五十二斤ですから前年の二百二斤に較べますと丁度七十五%に當るのでありまして、去年の二割五分の減收といふことになりませす。即ち南部の熊岳城地方の二割減より更に五分減と云ふ數字になつて居るのであります。此十四縣といふのは全滿作付の約八十七%を占めて居るのでありまして、此の十四縣の收穫數字が確かかどうかといふことが非常に滿洲全體の收量に影響が深いのであります。此の數字の吟味といふことが非常に大事になつて來るのであります、此反當收量から見ま

しても又此の成熟期もさう遅れてゐない點から考へましても大體平年作よりも五分或は一割減の收量といふのが妥當のやうに思はれるのであります。即ち此表の報告されて居る數字は大體に於て妥當と見做してよいと思はれるのであります、これを更に確實にする一つの理由としましては本年度の出廻數量が案外多かつたこととあります。此の出廻數量は第九表にございませすが、これは十一月末迄の出

第九表 各縣棉花出廻數量（十一月末日迄）（斤）

縣名	綠棉	實棉	縣名	綠棉	實棉
遼陽	四、五七九、三七〇	一九、九八二	錦西	三三一、六八三	六八七、五二四
遼中	一〇五、四七四	一一一、四五八	錦西	九、六五〇	一、五八三、〇九〇
海城	一、〇〇八、一七二	一七、二九九	興城	一一、一五八	一一五、七九七
蓋平	二、四一三、三二一	一九、三九三	綏中	一一、六八〇	三七七
營口	二、六六九、三三五	—	義中	二、二九三、五二三	五五七、四〇一
復遼	八、二三四	四六四	朝陽	三五、六八九	五五五
黑山	二、八三九	一五、七五九、六六六	凌源	五六、三八九	—
北鎮	二、三九、〇九九	八八六、七九九	計	一三、七七七、六一六	一九、七五九、八〇五

廻數量を取纏めたものであります。十四縣の外に營口縣が含まれまして十五縣となつて居りますが、繰棉が總計約千四百萬斤、實棉が約二千萬斤となつて居ります。繰棉を實棉に換算するには在來棉と

見まして約四倍するのでありますが、之を四倍しますと約五千萬斤、それから實棉が二千萬斤でありますから、十一月末迄に實棉にして約七千萬斤が出廻つて居るのであります、大抵十一月の末頃迄には七十%位迄例年出廻るのでありますから、これの約三割が其後出廻るとして昭和九年度の豫想出廻數量はどうなるかと言へば、約一億萬斤になるのであります。此の十四縣の豫想收量とこの出廻數量が大體に於て近い數字であることから推しても或は先程申したやうに成熟期の點から見ましても十四縣の一億一千万斤の收穫豫想高は決して多きに失したものでなく妥當であると私は考へて居るのであります。此十四縣以外の残りの作付面積がどれだけあるかと申しますれば約一萬一千町歩でございます。此等の栽培縣といふものは大體朝鮮側に寄つた方、或は北の方、或は熱河地方に分布されて居るもの集りでありまして、主要棉作地帯である遼陽、遼西地方に較べますと反當收量は自然落ちるのが當り前であります。假に今十四縣の反當收量の百五十二斤の二割減を生産するものとしてどれだけになるかに申しますと、一萬一千町歩から約一千三百萬斤の實棉が出るのであります。それで滿洲全體合計致しまして一億二千萬斤程度が本年の總收量ぢやないかと思つて居るのであります。唯だ先程申したやうに高燥地以外の排水の悪い低濕な土地に蒔かれたものは非常に成熟期が遅れまして且つそれだけ收量も減つたのでございます。例へば私の方の試験場は遼陽の附屬地にございますが、平坦地で非

常に地下水が高い所でありまして、棉作としては理想的の土地とは言へません、殊に本年のやうな氣象状態にぶつつかりまして益々熟期が遅れまして收量も悪うございました。それで開花開絮といふものが約二週間或は三週間位遅れました。平均收量は熊岳城の反當收量に較べまして約半作、五十五%位に相當する程被害を受けたのでございます。鐵道の走つて居る附近は概して平坦地で排水も自然悪く其處が偶々今年のやうな年は非常に作柄が悪かつたのです。且つ人の目にとまり勝ちであつて夏から秋にかけて大分棉作の悲觀説まで出た事もあつた程でありますが、併し一般奥地の方の高燥地帯は案外悪くなかつた、それで收量も平均して平年作の一割減と見まして約一億二千萬斤程度が全滿の收量であると考へて居ります。

それから本年の棉の品質でありますが一様に非常に熟期が遅れますと棉の品質が非常に悪くなるのであります。(圖について) 此處に棉の張力の試験を揚げて居りますが棉の實は段々上の枝へと付いて行くのですが上のもの程張力が弱くなつて行くのであります。即ち第十表を見ましても五月一〇日及七月一〇日に種子を播いた兩區とも枝の次第に上位に着いて居る蒴の張力は次第に弱くなつて居ります、即ち遅く開絮したものの程大體に於て張力が弱いと云ふ結果になります。

又七月一〇日播きの様に極めて遅く種を蒔き秋の終りに漸く開絮する様な植物は五月一〇日の様に

春早く種子を蒔き秋の中に立派に開絮した様な植物に比較して各枝の蒨は張力が弱くなつて居るのであります。

第十表 棉蒨の着生位置と張力(瓦)との關係

播種期	枝順		結果枝										
	枝上	の節順	1	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9
五月一日	第一節	七・六	六・二	六・八	六・二	五・四	—	五・三	四・九	六・一	六・二	四・〇	—
	第二節或ハ三節	五・三	五・一	—	—	—	五・一	—	—	五・〇	—	—	—
	第一節	—	四・〇	五・九	五・四	四・五	四・九	五・四	四・三	五・三	五・六	三・三	—
	第二節或ハ三節	四・九	四・五	五・〇	四・八	三・二	四・二	四・三	—	—	—	—	—

本年は植物の生育が遅れた上に霜が例年より早く來たのでありますのでこの圖の如く張力は非常に弱いのは當然であります殊に農民の作つて居る獎勵品種でない陸地棉に於て張力は一段と低下して居るのであります。それから尙ほ強い霜が十月の初め二日か三日に全滿に降つたやうな次第で、蒨は未だ十分熟してゐない前に霜の害を受けて非常に纖維に赤い色が着いたのであります、それですから未熟な纖維で張力が弱いといふ上に更に赤く汚染したものですから今年の品質は想像以上に落ちたのであります。大體に於て今年の一等棉は昨年の上等棉以下と見られて居るのであります。收量の點は

左程影響を蒙らなかつたのであります、品質が一段と落ちたことは事實でございます。

大體これを以て私の話を終りたいと思ひます、御清聴下さいまして有難うございました。(拍手)

(二月十四日講話速記)

熱河に於ける棉作に就て

京都帝國大學教授 榎本中衛氏

私は只今紹介せられた榎本であります。私は實を申しますと棉に就きましては経験が比較的少ないのであります。けれども昨年の夏滿洲棉花協會の招きに依りまして滿洲に於ける主な棉作地を歩いたのであります。そして滿洲に於ける棉の成育の状態を観察することが出来ました。其の結果は旅行が終りまして奉天に於て鐵路總局の方々の爲の座談會に於て述べました、それは滿洲棉花協會から「滿洲の棉花を語る」といふ題で既に發表されて居ります。其の要點を申しますと、視て歩いた結果從來認識不足であつた二つの大きな點がありました。其一つは、今寺田さんから御話になつた滿洲の棉作の適地といふものゝ考へ方が從來の氣象條件ばかりでなく地勢、モウ少し詳しく言へば標高の方を考へる必要があるといふ事と、それからモウ一つは熱河に於ける棉作が豫想外に良いといふ事の認識を深めたのであります。此の前段の事に就ては今既に寺田さんから御話になりましたので能く諒解されるのであります。後段の熱河の棉作に就て此處で暫く御清聽を煩しいと思つて居ります。

時間が餘りありませんから結論を先に申上げて見たい。熱河の棉作上の自然條件が南滿洲と同等か若くはそれ以上に適して居るといふ事、それから棉作の可能の面積が見積によつては違ひますが、大體五萬町歩乃至十萬町歩は得られるだらう、それで棉作の收量が繰棉にしまして反當り四十斤乃至五十斤得られるだらう、それは南滿洲と殆ど變りがないだらう。それからモウ一つ熱河の棉作上に於ける特徴に就て南滿洲と異つて居る點を言つて見たい。そして最後に滿洲全體に於ける棉作の期待に就て結論を下したい、斯う思ひます。

先づ自然條件であります。熱河の自然條件に就て調べられたものは從來殆ど無いのであります。唯だ最近發表されました熱河の探險隊に加つた高橋理學士が引用して居ります承德の第何師團か其の司令部の觀測と、それから赤峰の領事館にある氣象の觀測の結果とであります。之を見ますと、數字を抜きまして、溫度は先程寺田さんの申されました南滿洲の溫度よりも寧ろ六、七、八月に於て高くなつて居る。それから其次に從來棉作について大事の條件とされて居る無霜期間、これもやはり南滿洲と同程度、即ち百八十日から百六十日位になつて居るといふことである。此二つで以て大體此の地方に於ける棉が四月下旬から五月上旬に蒔付けられ、其後順調な成育を遂げて九月中下旬から十月中旬の頃迄に開絮して收穫出来るやうになるといふのは明らかであります。事實私が巡りましたのは七

月の上旬でありましたが、其時の成育の状態を錦州或は義縣地方の成育の状態と較べまして熱河の方が遙に進んで居つたといふ事でも分ります。

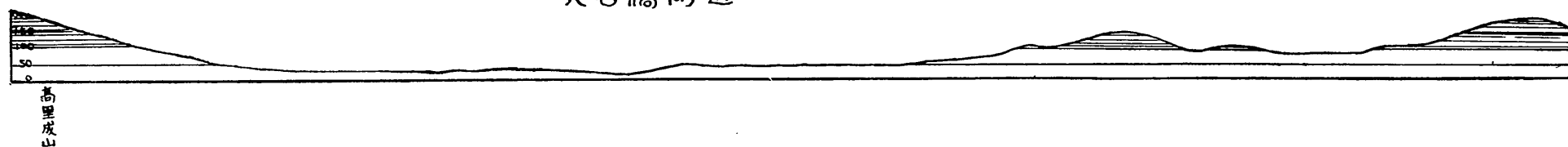
尙ほ自然條件の上に於て熱河の一つの特徴があります。それは先程寺田さんが言はれたやうに、南滿洲に於ての適地といふものは比較的の高い、標高の高い傾斜地であると言はれましたが、全く其通りであります。所が熱河に於てはさうではなくして、大凌河の流域に於ける平地が棉作の適地であります。極く子供だましのやうな繪でありますが、滿洲に於ける地勢圖を描いて參りました。

(第一圖について)南滿洲の方から話しますが、これは大石橋附近の棉作地域であります。此の大石橋附近の棉作地域は非常に古い歴史を有つて居る地方でありまして、今でも恐らく滿洲に於ける一番棉作の進んだ地方になつて居ります。此上圖は其の地方の地勢を大體表はしたのであります。大體南北に斯ういふ山が斯うあります。そして此の色分けは、一番下の色が五十メートル以下であります、其上が五十メートルから百メートルの間、其上が百メートルから百五十メートル、其上が百五十メートルから二百メートル、それから二百メートル以上、斯うなつて居りますが、南滿洲で大事な棉作の適地は此の百メートル以下になつて居る傾斜地であります。次に下圖の熱河の方を見ますと、熱河の一番上のは朝陽で、此の平野は熱河に於ける代表的の棉作地であります。それを見ますと、朝陽とい

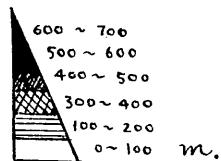
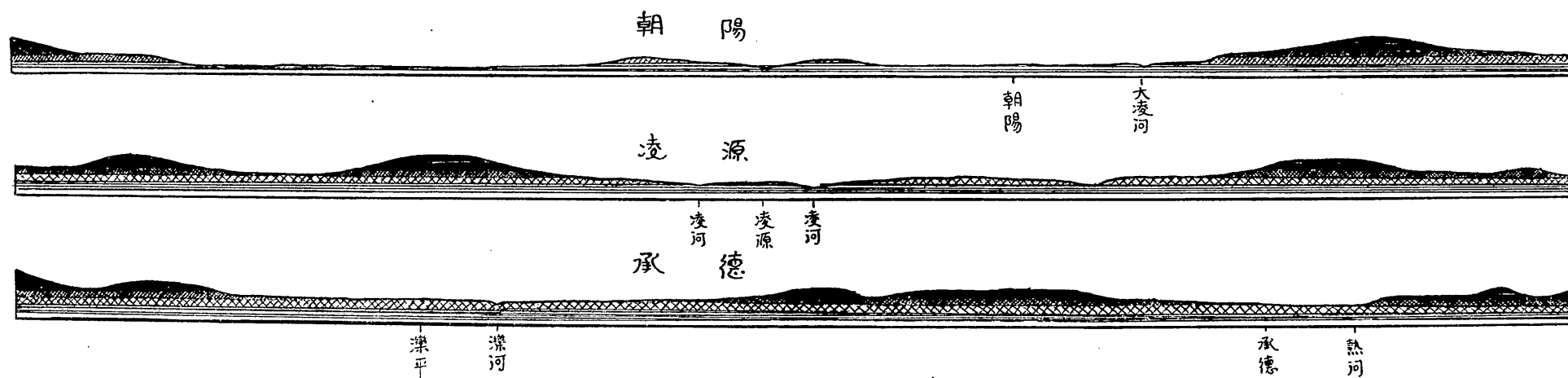
第一圖 滿洲國棉作地域地形圖

南滿洲代表的棉作地域地形圖

大石橋附近

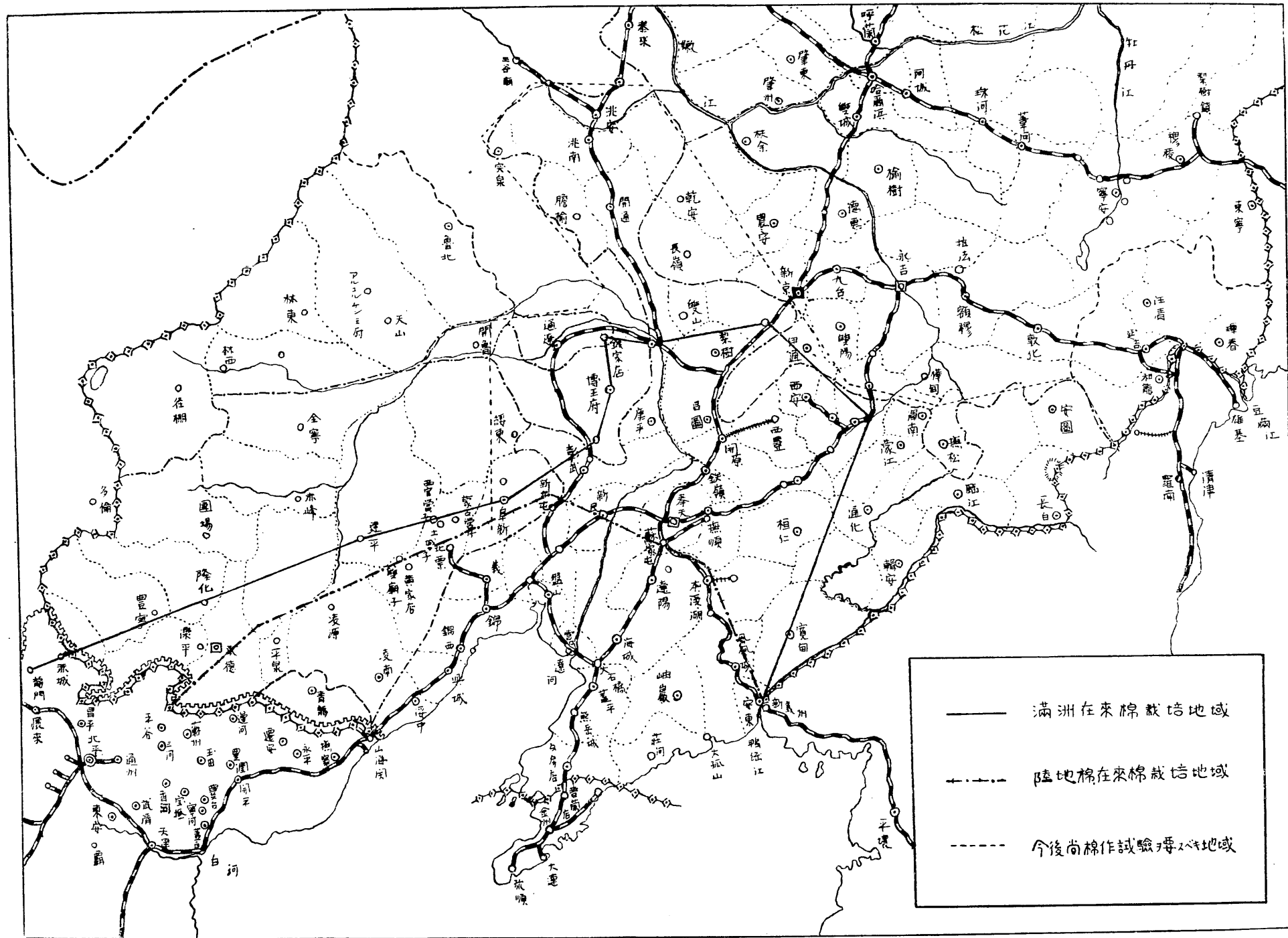


熱河棉作地域地形圖



トルから二百メートル、それから二百メートル以上、斯うなつて居りますが、南滿洲で大事な棉作の適地は此の百メートル以下になつて居る傾斜地であります。次に下圖の熱河の方を見ますと、熱河の一番上のは朝陽で、此の平野は熱河に於ける代表的の棉作地であります。それを見ますと、朝陽とい

第二圖 滿洲國棉作地帶圖



ふ町が平地に在りますが、其の平地は百メートルから二百メートルの高さであります。其の平地の中を大凌河が斯ういふ風に流れて居ります。此の平地に盛に棉作が行はれて居ります。即ち南滿洲とは大分違つて居ります。

續いて序でありますから此處で熱河の棉作の地帯の地形を申し上げますと、大凌河を溯つて行きますとズツと其の流域に平原があります。平原と云つても大きいのでなく比較的小さい平原で處々に盆地様を成して居ります。其の下流、即ち東の北の方から西の南の方へ行くに従つて漸次地形が高くなつて居ります。それではどの邊まで棉が作られて居るかと言ひますと、西南に行くに従つて漸次高いのであります。朝陽からバスで十時間位の處に凌源といふ所があります、其の凌源の町の附近の平原にもやはり棉作が行はれて居るのであります。其處は二百メートルから三百メートルの高さであります。それから今度更に南へ行きまして平泉といふ縣がありますが、其の縣の六溝に棉作が行はれて居りますが、其處は三百メートルから四百メートルの間の地點になつて居ります。斯ういふ風に東北から西南へ大凌河を溯るに従つて段々高くなつて行つて居りますが、其の處々の平地で棉作が行はれて居ります。此の大凌河が棉作のみならず一般の農作物に一番重要な役割を爲して居るので、恐らく此の地方が熱河に於ける唯一の耕作農業地帯であらうと思ひます。

そこで、それでは何故熱河では平地で棉作が行はれるかといふ事を考へて見ますと、熱河は雨が南滿洲と較べますると幾分少いやうになつて居ります。多少人によつても違ひますが、年降雨量が四百ミリから六百ミリになつて居りますから、南滿洲よりも幾分少い氣味がある。而も其雨は南滿洲と同じ様に七割乃至八割位といふものは六、七、八の三ヶ月に降る。更に其上に熱河の雨は非常な驟雨性を有つて居る。それで降つた雨は大凌河の河底が平地より非常に低いので直ぐに平地を流れ去つてしまふといふ關係上、熱河に於ける平地の耕作地は非常に排水が良いといふことになります。これが棉作が安全に而も良く出来る理由だらうと考へます。

次にそれでは熱河に於ける棉作の適地の面積はどの位かといふ事を申したいと思ひます。前に大體數字を申し上げましたが、熱河の北の方は沙漠地帯で、その南の方は高嶺な地帯で非常に高い嶺續きの地帯であります。それから其次が今言つた大凌河の中部地帯となるわけであります。更に西南の方には高い山がありまして、其間は溪谷を成して居りますが、此處もやはり棉作は可なり行はれて居るやうであります。其の面積が餘り大きくない。で熱河の棉作といふのは前に申したやうに大凌河の流域が一番適して居ることになります。此の面積がどの位あるかといふ事が今迄未だ調査が行届いてゐないので分らないのでありますが、此の地圖の上から計算して見まして極く大雑把な數字であります。

が、河の流域の二百メートル以下の地帯が約百萬町歩あるだらうといふことが言はれます、それで今棉作地域が其の一割と假定しまして十萬町歩の面積は得られるだらうといふ推定をするだけでありませう。曾て大同二年に於て或る人が熱河の耕地面積を調べたのがありますが、それに依りますと、熱河の中で棉作に關係ある十縣の耕地面積が六十二萬町歩になつて居ります。其中更に比較的棉作の行はれたことが少いと思はれるやうな三縣を除きました残りの七縣で耕地面積が五十五萬町歩になります。で假にその一割を棉に提供すると考へまして五萬町歩といふことになります。ですから少くとも五萬町歩乃至十萬町歩位の棉作は遺様に依つては出来るだらう。それは勿論政策一つでありまして、それ以上にも或はモツと非常に多量に生産するといふことも出来るだらうと思ひます。大同二年に棉花協會で調べたものに依りますと、現在熱河で作られて居る棉作の面積は十縣で八千町歩位になつて居ります。それが前年度棉花協會の指導員を配置した三縣で調べたものに依りますと三千町歩。其の大同二年に調べたものと、それから昨年の指導員が調べたもの、これは比較的に正しい數字であると思ひますが、それとの率を考へますと、約五千町歩位の棉作が今熱河全體で行はれてゐるといふことが言はれます。それで其中何處が一番多いかと言ひますと、熱河の東北の方の部分に阜新といふ縣があります、それから大凌河の上流地方で朝陽、凌源、この三縣が先づ熱河に於ける大きな棉作地域であ

ります。それからその南に凌南、青龍といふ二縣があります、此の二縣はなかく交通が不便でありますけれども、此處でも相當棉作が行はれて居ります。

次に熱河に於ける棉作の特徴であります。其の特徴の一つとしまして熱河に於ける棉作は南滿洲と違ひまして其の品種が多少違つて居ります。これが吾々が一番驚いた點であります。熱河に於ては陸地棉、即ち米棉が非常に多い。今年の調べに依りますと七割乃至九割位が陸地棉になつて居ります。これが南滿洲と餘程違ふ點でありまして、これから見ましても熱河の自然條件といふものは南滿洲以上に棉作に適するといふことが分るのであります。其の品種を言ひますと大體南滿洲と同じであります。唯だ違ふのは、これ等の地方の陸地棉は先程寺田さんから言はれたやうに恐らく北支那から漸次這入つて來たものであらうと考へられます。隨て南滿洲に作られてゐる陸地棉とは多少違つた所があります。一般に棉花協會で獎勵して居る品種以外の陸地棉といふものは晚いのであります。熱河の陸地棉は尙更それ以上に晚いやうに見受けられます。其點が大分違つて居ります。所が此の熱河産の棉の品質がどんなものかといふことを今年出來た棉について調べて見ました、即ち繰棉歩合、或は纖維の長さ、其他の項目を調べて見ましたが、幾分南滿洲のものよりは劣るが、大體南滿洲と同じ位の程度に在ることが分かりました。それで大概現在作られて居る南滿洲の棉と同質の棉が生産し得るといふことが言はれると思ひます。

此處で熱河の棉の缺點を申し上げます。後に標本を御覽に入れますが、熱河の在來棉、即ち東洋棉であります。それは南滿洲に於けると同じ様に非常に雜駁な種子が使はれて居る。それから前に申したやうに陸地棉の方は非常に成熟期が晚過ぎるといふことが第二の缺點である。これ等の點については滿洲棉花協會は良い種子の供給と、それから陸地棉は關東廳の農事試験場で出來た「關農一號」といふやうな早い種子を供給するといふことに依つて改良されるであらうし、そしてそれが最も急務であると思はれます。それでは此の品種の生産能力といふか、一定面積からどれ位穫れるか、即ち反當り收量がどれ位かといふ事を調べたものに依りますと、一天地が約千石といふことになつて居ります。一天地は六反でありますから一反歩から百六十七石位になります。で前に言ふ繰棉にしまして反當り四十石乃至五十石といふ目安を付けたのであります。でありますから今假に五十石と致しまして、五萬町歩にしますと二千五百萬石になりますし、若し假に十萬町歩あれば五千萬石の生産になるといふことになります。

次に熱河の棉の取引状態がどういふ風になつて居るかといふ事を一寸御話します。熱河で出來る棉は大部分は打棉とされまして中入棉用に使はれる、前に言つた大凌河一帯の山中から奥の方に送られ

其處で消費されて居るやうであります。唯だ阜新縣の棉だけが實棉のまゝ奉天省黒山縣の新立屯の市場へ出て来て賣られて居るやうであります。若し將來「關農一號」のやうな早熟性陸地棉が栽培されてしましてそれが紡績棉にでも使はれるといふことになれば、これは奥地へ行かないで恐らく奉天鐵路總局の熱河線に出て來ると考へられます。

次にモウ一つ熱河の特徴として棉に對抗する作物が南滿洲と違つて居るといふ事であります。それは熱河の特色である罌粟が非常に栽培されて居ります。阿片專賣局の調べに依りますと約三萬町歩現在栽培されて居るやうでありますが、其の罌粟が非常に有利な爲にこれが棉に對抗する作物になります。專賣局の調べに依りますと、一畝——一畝といふのは日本の六畝に相當致して居りますが、其の一畝當りの數字を言ひますと、總收入から肥料代と税金とを差引いた所謂純益と手間賃の引括つたものが一畝當りに付て三十一圓といふことになつて居ります。棉を前に申上げました數字に依り大同年の相場から推算して見ますると約九圓位になります。罌粟を作る方が約三倍以上の手取金が多いことになつて居ります。でありますから罌粟が栽培を許される間は棉には比較的來惡い。モウ一つ棉に對抗する關係は、熱河では自分の家の圍りに多くは罌粟を栽培して居ります、棉もやはり自分の家の圍りに栽培して居ります。棉と罌粟と較べますと、棉の方が幾分家よりは遠い所に栽培されて居

ります。其の作付ける圃場の状態から考へましても罌粟は棉の栽培發展について一つの強敵になるわけであります。併し聞く所に依りますと、熱河に於ける罌粟といふものは段々と禁止する方針ださうであります。若しさうなれば之に代るべき作物は當然棉になるだらうといふことは豫想されます。それからモウ一つ熱河での對抗作物として棉に匹敵する位の有利な作物は陸稻になつて居ります。これが前に申上げましたやうな單位で申しますと一畝當り六、七圓の手取になります。これ等が南滿洲とは多少違つた特徴のある點であります。

尙ほモウ一つ棉の栽培の上に於て熱河は多少の特徴を有つて居ります。それは南滿洲と較べまして幾分集約であります。と申しますのは、前に話しましたやうに雨が少い關係上播種期に於て水分の缺乏を來すことがあります。でありますから播種當時に於て灌漑をして播種して居るといふのが一つ、それから多くは今申しましたやうに極く家の附近で栽培されるものでありますから、肥料其他勞力の上に於て十分管理が行届くといふ點が即ち南滿洲よりは幾分集約に行はれて居る、此點から考へましても熱河の棉の生産力といふものは南滿洲よりも幾分高くなるといふことは十分可能性があるといふことを言はれると思ひます。

最後に滿洲の棉作の地域を言ひますと、(第一圖參照)此圖に赤い斷線で現はした所が恐らく將來陸

地棉が大部分になるだらう。それから其上に東北に向つて出張つて居る地帯は在來棉の地帯になるだらう。それから更に北の方に向つて洮南の邊まで出張りそして斯ういふ風に安東へかけた地帯、此の地帯といふものは現在ちよいと棉の栽培を見るが猶試験研究を要するだらう、大體此三つになつて居る。それで今棉花協會が主力を注いで居るのは此の陸地棉の地帯である、斯ういふことが言はれると思ひます。

甚だ簡單でありまして十分とは申されませんが、少し健康を害して居るやうな關係上不行届の點があるかと思ひます。長い間御清聴下さつて有難うございました。(拍手)

(二月十四日講話速記)

昭和十年二月十五日印刷納本 (非賣品)
昭和十年二月二十日發行

編輯兼發行人 篠崎嘉郎

東京市澁谷區信子路百七十五番地ノ十號

印刷人 島連太郎

印刷所 三秀舎

東京市神田區美土代町十六番地

東京市麹町區丸ノ内三丁目十四番地

發行所 日滿實業協會

電話丸ノ内(23)三五番一三八番
振替貯金口座東京四五八〇二番

